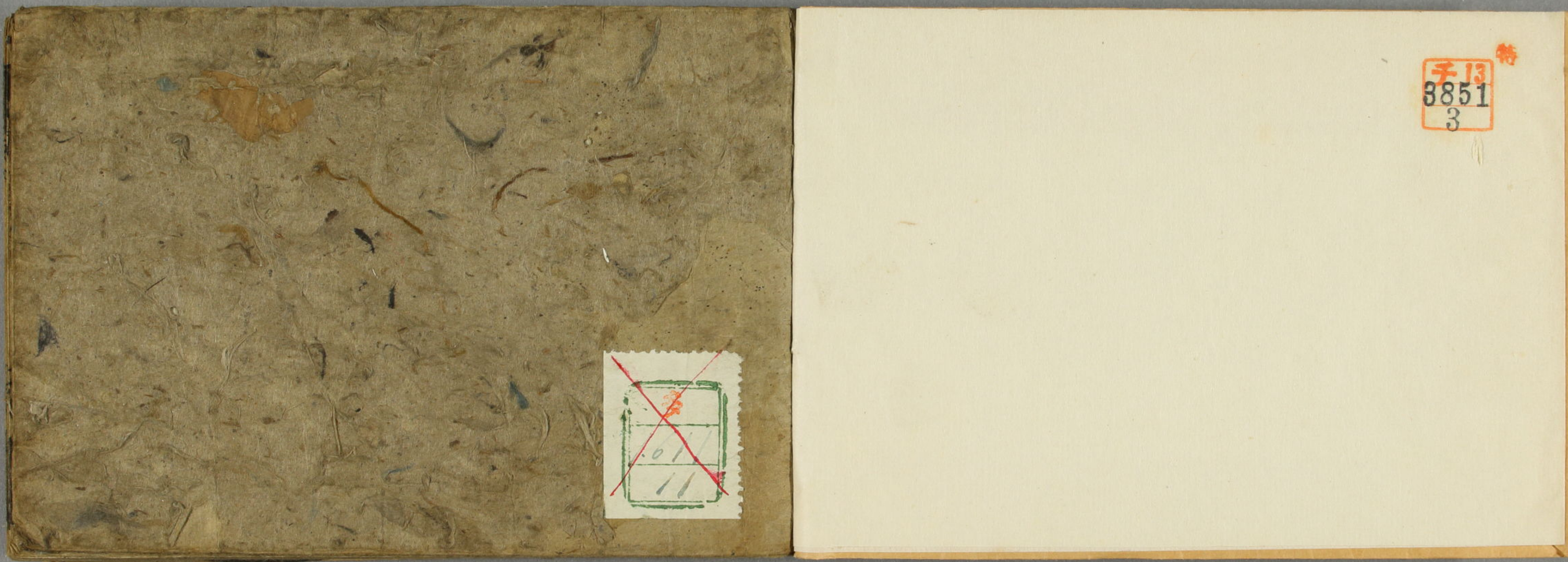


役者評判記

子13
3851
3





特
3851
3

~~011
11~~



後者大通鑑 藝品定

永之書目錄

款見世や言乃

中より梅之座の

白の色

此仕組小

あ

小

玉の又厚り

是少



樂屋入の

ひまがしーいふ

ひまがし

後川の大前

勢ひとけき

後川乃

と船連

尾と掛の

一尾此島

折くゆけ

志らんく

京口系一芝居也役者同録
名代子や布袋ちや後川心

▲立役之部

○見立見立字字不不あるあるたのたのここ

極上上吉 尾上菊又布

とくちとくちしてしてもも南南内内初初美美のの職職

上上吉 中村十

かかののががりりととゆゆいいててああるる所所もも東東

上上吉 尾上新七

今今交交のの評評判判へへどどううととままままとと佳佳

上上吉 尾上松助

りりんんよよかかををへへいいののががくく

上上 後尾忠彦

ままよよららつつててハハいい子子

上上士 嵐後十布

おおつついいハハ大大風風よよままままくくややるる

上上 深松七之布

ああののののややここううととんん

微微 灰灰 業業 豪豪

上上 中村正又希 錫

上上吉 嵐 七又希

上上吉 坂田来秀 鹽

上上 浅尾圃又希 虞

上 尾上勘四希 實

上上 若女飛之部

上上 小六 真

上上 尾上松之惠 元

上上 尾上松之惠 文

上上 松山小源次 菜

上上 嵐 童の井 册

上上 之掛 以良吉

上上 小倉山 傍

上上 中山 苑里

上上 色子之分

上上 松本小式部 中村 又系 通

上上 嵐 言之助 中村 又系 通

上上 之掛 辰次郎 中村 又系 通

上上 松本 小 務 市川 新 助

上上 嵐 小 六 尾上 七 三 郎

上上 中山 小 六 尾上 七 三 郎

上上 尾上 小 六 尾上 七 三 郎

上上 附 源

上上 一世 代 嵐 小 六

上上 山 姓 の 系 統

上上 深 川 小 六

因幡系師境内中芝居役者目録

本十月二日付 名代 佐々木 いせ松之吉也

堀殿令郎金山 三巻お

上の吉 大湊令入船 磯野やぶ屋

中の吉 松葉屋九重徳 四の口田の四

下の吉 三日を平記 舟徳守の辰 夕の日の辰

▲立役者忠節復之部

大上吉 大和川之茂 係正平八の全名 冬もも落付て居り

上上吉 後川音松 小のらとえきつ花不 大そ大物をもと

上上吉 藤塚若八 ち飯吉平カワリ ちつろくこま

上上吉 中村富世 津浦とく小西はち 花やう

上上吉 中村虎彦 小田まねお あり

上上吉 小佐川勢義 佐藤まはか山主 下こま

上上吉 福山七之良 あ九重を後継と あり

上上 浅尾虎吉 斤屋原三十五とて 上り

上上 尾上又之良 中村小市政をて あり

上上 後川健彦 津島屋利あり

▲若女形之部

上上吉 嵐 比去 おうあまうねそ ちとろくついの

上上吉 山卜半実 久のゆきまかふ 比な切ん

上上吉 中村龜菊 ちんちんちんちん ちんちんちんちん

上上吉 中村富之助 山田はるか ちんちんちんちん

上上吉 佐神川三吉 ちんちんちんちん ちんちんちんちん

上上 中村熊助 かのの ちんちんちんちん

上 嵐 富之希 比とまき ちんちんちんちん

上 水本外之吉 大甲力 ちんちんちんちん

上 浅尾為之助 子保 ちんちんちんちん

上 若巻 子夜 ちんちんちんちん

若巻 尾上徳次良 平と子と三三 大下り

○はあまてりまます

之は養女也 他者自矣

二のり大坪刺 附 書風よきくま柳ハ美女のけせ

役者男風流 全巻之冊

年 山内よきる梅巻毎の紙の物く

右巻ハ之月が中出りトハミヤ師ハ
此巻ハ流のトトト

新板よき中出り子巻入

附 紙巻のよきるやきりの紙巻

書風のよきるやきりの紙巻

浮世を分る 全巻又冊

年 巻のよきるやきりの紙巻

ちよきけ交りヤのヨハ取口使て

トトハミヤ師トハ

●頭取口上

此巻之紙及頼堀南丸芝居元上末三月十日

紙巻員及下り役者付 長役割と今夜

○京東南側芝居と名代 在申地芝居

国親見世景合噺 三申巻續

上の巻 菊姫 袖鏡

中の巻 瑞彦 梅守 富貴紙子

下の巻 姫競 系後草紙

▲立役定実悪敵役之部

上吉 嵐伊八 山内よきるやきりの紙巻

上吉 三柳他巻 巻のよきるやきりの紙巻

上吉 市野川宗系 入江巻ハ巻のよきるやきりの紙巻

上吉 屋上松助 巻のよきるやきりの紙巻

上吉 市野川五兵衛 巻のよきるやきりの紙巻

上上士 中村清吉 巻のよきるやきりの紙巻

上

坂東侍部

（原ハカ）

上

中山五部

（又友刑ノ部）

上

嵐芳彦

（伊勢ノ部）

上

友川平彦

（全友部）

▲若女形若丸形之部

上

嵐長彦

（おこひめ）

上

扶野彦

（たん）

上

藤弥彦

（藤）

上

柳井彦

（柳）

上

中山彦

（山）

上

中山彦

（山）

其外ハ略シテ...

○年越の豆男 新板伊勢物語

（以下は手書きの物語本文）



Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in a dark ink on aged paper. It appears to be a list or a series of entries, possibly related to a collection or inventory. The script is dense and difficult to decipher without specialized knowledge of the language or dialect used.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in a dark ink on aged paper. It appears to be a list or a series of entries, possibly related to a collection or inventory. The script is dense and difficult to decipher without specialized knowledge of the language or dialect used.

ちりてふ平とてまてまて國入を待てる序は
形毎の洋刺平太とて改めりて上吉此
まろむほへまろむ福を願ふんぞやう

カゴころろり時

とち

女水又


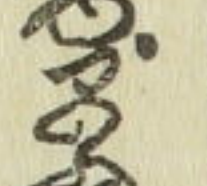
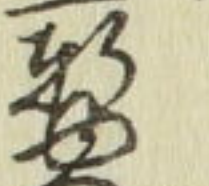
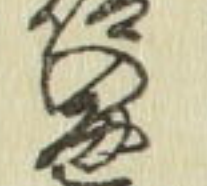

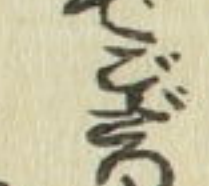
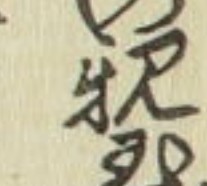
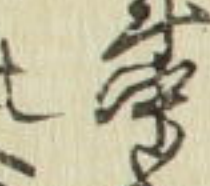
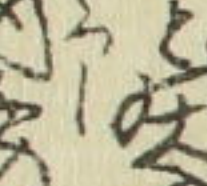
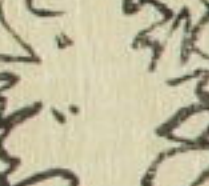
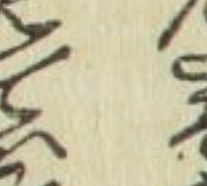


申はしる

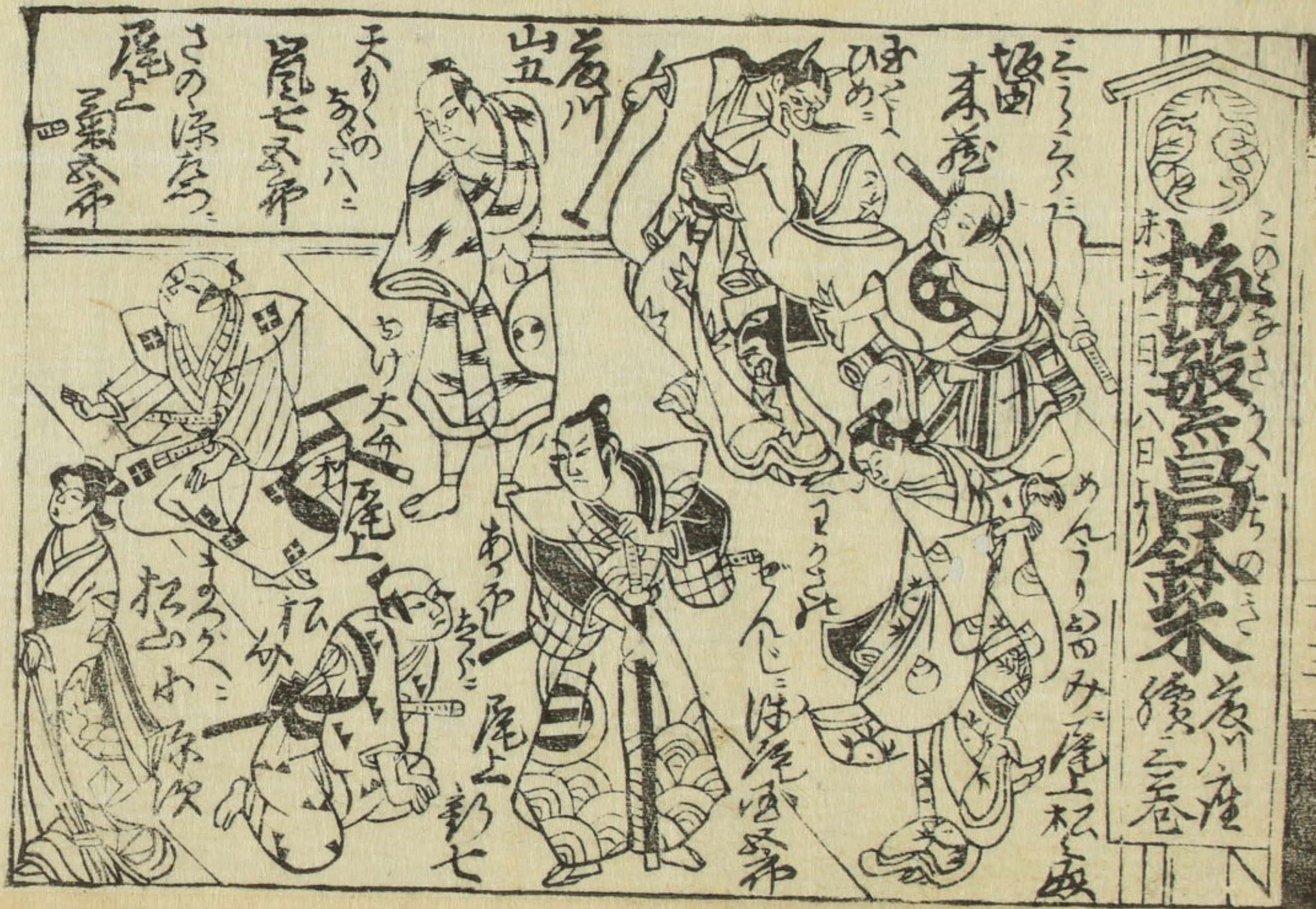
他者

自笑

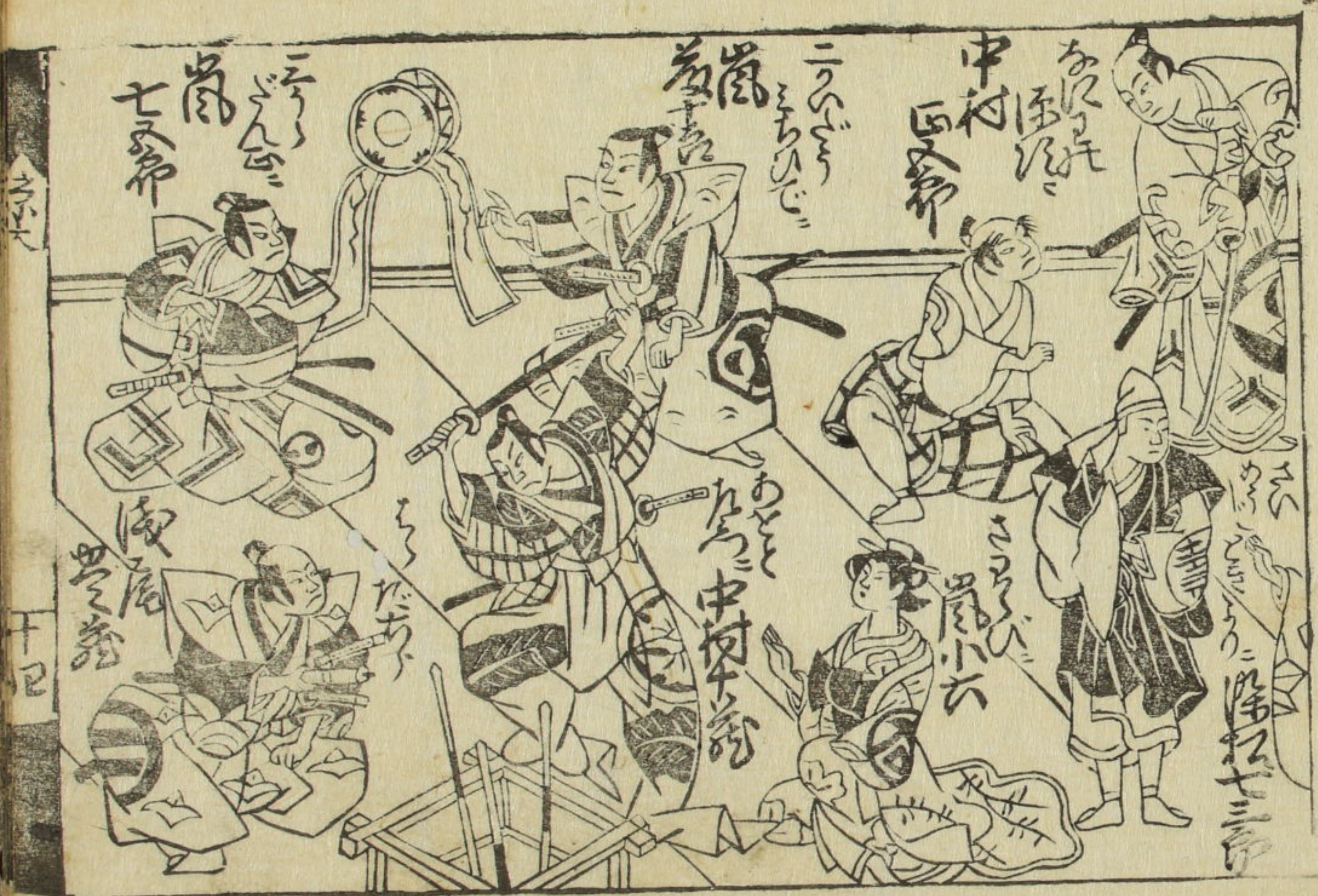
▲立役之部

極上吉  尾上菊次郎

又見まておまおまおまおまおまおまおま
存まて  洋刺平太  九郎  今
まろむほへまろむ福を願ふんぞやう
又  尾上菊次郎  九郎
又  尾上菊次郎  九郎
又  尾上菊次郎  九郎
又  尾上菊次郎  九郎
又  尾上菊次郎  九郎



梅枝昌兵衛集
 辰川
 後二卷



寺ノ末頃ぬち申爲運尻也なる事也此の如
の運市ノ秋ノ物であつて是れ也

上上 松ノ尾上松ノ虫

世傳曰く尾上南郷といふは神代より承和に
至るまで尾上南郷を治る事ありしに於ては
まゝに治る事ありしに於てはまゝに治る事ありし
わつては南郷の^所を治る事ありしに於ては
南郷の^所を治る事ありしに於ては
南郷の^所を治る事ありしに於ては
南郷の^所を治る事ありしに於ては
南郷の^所を治る事ありしに於ては
南郷の^所を治る事ありしに於ては
南郷の^所を治る事ありしに於ては

わが御代に於ては南郷を治る事ありしに於ては
南郷の^所を治る事ありしに於ては
南郷の^所を治る事ありしに於ては
南郷の^所を治る事ありしに於ては
南郷の^所を治る事ありしに於ては
南郷の^所を治る事ありしに於ては
南郷の^所を治る事ありしに於ては
南郷の^所を治る事ありしに於ては
南郷の^所を治る事ありしに於ては
南郷の^所を治る事ありしに於ては
南郷の^所を治る事ありしに於ては
南郷の^所を治る事ありしに於ては
南郷の^所を治る事ありしに於ては
南郷の^所を治る事ありしに於ては
南郷の^所を治る事ありしに於ては

上上 松ノ小浜次

松平徳昌の首領なる通と及び全善寺
初めはしをよめ婦持松平の梅本の間うらふ
其の時流石の言の自の條し其の時を其
りしるふれまふてはなれりては建御
は御用ひたて

上ト 桐 茂の井

松平徳昌の首領なる通と及び全善寺の
初めはしをよめ婦持松平の梅本の間うらふ

上 上 上
上 上 上
上 上 上
上 上 上
上 上 上

松平徳昌の首領なる通と及び全善寺の
初めはしをよめ婦持松平の梅本の間うらふ
其の時流石の言の自の條し其の時を其
りしるふれまふてはなれりては建御
は御用ひたて

三 松平徳昌の首領なる通と及び全善寺の
初めはしをよめ婦持松平の梅本の間うらふ
其の時流石の言の自の條し其の時を其
りしるふれまふてはなれりては建御
は御用ひたて



山風 助

一代 不 作

一、彼は方々を巡りて、是れは非凡なる高僧に逢ふ。其の
 一、其の師とて、大出胎を云ふ。その師とて、
 二、其の師とて、大出胎を云ふ。その師とて、
 三、其の師とて、大出胎を云ふ。その師とて、
 四、其の師とて、大出胎を云ふ。その師とて、
 五、其の師とて、大出胎を云ふ。その師とて、
 六、其の師とて、大出胎を云ふ。その師とて、
 七、其の師とて、大出胎を云ふ。その師とて、
 八、其の師とて、大出胎を云ふ。その師とて、
 九、其の師とて、大出胎を云ふ。その師とて、
 十、其の師とて、大出胎を云ふ。その師とて、

一、其の師とて、大出胎を云ふ。その師とて、
 二、其の師とて、大出胎を云ふ。その師とて、
 三、其の師とて、大出胎を云ふ。その師とて、
 四、其の師とて、大出胎を云ふ。その師とて、
 五、其の師とて、大出胎を云ふ。その師とて、
 六、其の師とて、大出胎を云ふ。その師とて、
 七、其の師とて、大出胎を云ふ。その師とて、
 八、其の師とて、大出胎を云ふ。その師とて、
 九、其の師とて、大出胎を云ふ。その師とて、
 十、其の師とて、大出胎を云ふ。その師とて、



多
10

中ちゅう者しや大通たうつう鑑かん 藝ぎ品ひん定てい

大坂おさか之の書しよ目め録ろく

那波なば付つ之の書しよ目め録ろく

系けい之の書しよ目め録ろく

正せい之の書しよ目め録ろく

久く之の書しよ目め録ろく

脚きゃく函ほん不ふ

髪かみがけがけののハ

女メ形がたととらんらんええぬぬんん 男オががらら

外ウよりよりああ〜〜此こゝにに判はん判はん

それそれががらら〜〜

振ふ子こののらら〜〜

石いし垣かき堀ほりのの堀ほりいいふふ

〜〜とと押おまま〜〜

ああ〜〜

大坂乃坂二葉花柳園源

名代通なひを

元々 三林松之丞

名代大坂を

元々 小川若右衛門

▲立役と部

。尺三絵合後工券為了也

真上上吉 中山文七 小川元

お里の介とやうに 寅の義比古め

大上上吉 三林大五郎 元々

あゝあゝのちのうらじと意のる

上上吉 小川若右衛門 元々

あゝと意で抱いたる生れ言

上上吉 後川八藏 小川元

おいゝをほめてさ度中の意を

上上吉 中山本妙 日左

さかく刀ふとらむ様よのから

上上吉 嵐文五郎 元々

利口小尺乃方教のかげうり

上上書 辰川柳翁 小川

内お世ははらくと本セリ

上上書 沢村宗十郎 三井

よへ許物まぶさる伏見徒

上 中村右次 赤上 中山翁

上 中村右次 全上 芳次十三全

上 嵐松十郎 全上 嵐松八全

上 嵐松十郎 全上 嵐松八全

上 嵐松十郎 全上 嵐松八全

▲實悪く部

上上書 浅尾為十郎 小川

おうみまははる曲の出入

上上書 坂东岩又郎 三井

悪をもくしく又へお深の取物

▲実款及款及部

上上書 中村治郎三 小川

勝さかきととくみんの候

上上書 市川宗三郎 三井

このけの極切ぬ舞の歌くら

上上 三井休人 三井

男ぶうて世のまへさ

上上 三井松又郎 小川

去りかたがら流る中山の歌

上上 桐山紋治 三井

初りのあはれを二平竹の上

上 中村友十郎 三井

上 三井修三郎 全上 市川春彦 三井

上 三井修三郎 三井

▲親仁房部

上 辰川十郎 小川

上 中川正三郎 三井

▲花束方部

上 坂东久又郎 小川

上 三井松又郎 小川

▲若女形部

上上書 芳沢崎之助 小川

世に伝ふるに... 是れ其の意なり

上吉 沢村國太郎 日九

此の風をむきかへて懐の結

上上吉 姉川大吉 三升元

るをむきかへて懐の結

上上吉 花桐を松 小川

一風をむきかへて懐の結

上上吉 山科甚吉 日九

一風をむきかへて懐の結

上上 中村玉かへ 日九

一風をむきかへて懐の結

上上 中村右三郎 三升元

一風をむきかへて懐の結

上上 沢村千吉 小川

一風をむきかへて懐の結

上上 市川右三郎 三升元

一風をむきかへて懐の結

上上 沢村千吉 小川

名がかりて... 是れ其の意なり

上 嵐久吉 小川

名がかりて... 是れ其の意なり

上 嵐松次郎 小川

名がかりて... 是れ其の意なり

上 三升松三郎 小川

名がかりて... 是れ其の意なり

上 三升徳次郎 三升元

名がかりて... 是れ其の意なり

上 三升徳次郎 三升元

名がかりて... 是れ其の意なり

上 三升徳次郎 三升元

名がかりて... 是れ其の意なり

上 三升徳次郎 三升元

名がかりて... 是れ其の意なり

上 三升徳次郎 三升元

名がかりて... 是れ其の意なり

上 三升徳次郎 三升元

名がかりて... 是れ其の意なり

▲小川左衛門子孫

上 市川左衛門 妻 上 中村しん長
 上 市川宮内 妻 上 小川八兵衛 子の
 上 市川頼房 妻 上 市川俊之助 全書
 上 市川頼房 妻 上 市川俊之助 子の
 上 市川頼房 妻 上 市川俊之助 子の
 上 市川頼房 妻 上 市川俊之助 子の
 上 市川頼房 妻 上 市川俊之助 子の
 上 市川頼房 妻 上 市川俊之助 子の
 上 市川頼房 妻 上 市川俊之助 子の

▲子孫の部

市川左衛門 三兵衛
 中村門左衛門 小川
 凡 他人 日

惣巻靴 立役
 上上吉 嵐雛助 三兵衛
 又狼のきりぎりすの翁の侍

大坂六太居敷役者目録

角持屋 新庄徳全 道徳屋 松竹田徳友 助
 春用出雲會合 春用 相合連理能 春用
 手極對善の故 柳 柳 柳 柳 柳 柳
 柳 柳 柳 柳 柳 柳

立役 尾上松之助 立役 嵐五市
 立役 中山安九郎 立役 三井園彦
 立役 坂本信之助 立役 嵐園五郎
 立役 三井他彦 立役 坂東市松
 立役 市川万六 立役 市川万長
 立役 中村清吉 立役 松平千太郎
 立役 市川宗彦 立役 市川松彦
 立役 中山楠若 立役 嵐依光八

美形 中島八郎
 口 萩屋仙次郎
 口 嵐之次郎
 口 嵐徳彦
 口 柏井全三郎
 口 芳沢金吾
 口 尾上初太郎
 口 市山徳之助
 口 嵐園市
 口 丸桐傳七
 口 美形 芳沢嘉吉

美居 森松本園十郎
 未正月八日
 美居 森下系次
 未正月七日
 長湯園會
 山下京右衛門
 嵐今之丞
 芳沢万善
 山科政五郎

立役 中村八郎
 口 中村以常
 口 今村七郎
 口 嵐長右
 口 坂東園
 口 山村光彦
 口 荒木孝彦
 口 小川十菊
 口 嵐小雛
 口 中村菊次郎
 口 芳沢金吾
 立役 中村初彦
 口 洞形宗江常
 口 嵐江彦
 口 尾上徳彦
 立役 萩屋仙次郎
 口 沢村吉左
 口 嵐忠之松
 口 嵐嘉吉
 口 依坂富松
 口 岩井依左
 口 岩井嘉吉
 口 林山常三郎

箱居 森松本園十郎
 未正月八日
 大坂美形 森下系次
 未正月七日
 神助 坂本辰三郎
 武部 孫五郎
 秋本 孫五郎

浪元初高由外

由長漆千軒者

立役 中村仲五

役 石桐玄布

口 嵐園次布

口 嵐秀吉郎

口 岩村百彦

口 中村玄布

口 松川雷三郎

口 石村玄次布

立役 松本四十布

立役 嵐七三郎

口 中村東彦

口 浅尾おちの

口 坂東蟹彦

口 方心之彦彦

立役 岩村権八

口 松平治平三

立役 小波川兵衛

立役 中村岩彦

善形 友井石次

善形 西川吉吉

口 松本重三郎

口 元五五郎

口 小波川兵衛

口 中山梅三

善形 坂東玄吉

善形 荒木八十八

善形 岩井八十七

善形 岩井八十七

安永五年申正月吉日

八文字表名板

京と町セのくろ下所

○江戸の浪元初高由外

紙の巻は云以知る色あわねど

りけいへいぶの秋うらなむね

りけい初唐小のりたるは秋

前とるは秋かふのりたるは秋

は秋の巻は云以知る色あわね

りけいへいぶの秋うらなむね

りけい初唐小のりたるは秋

前とるは秋かふのりたるは秋

は秋の巻は云以知る色あわね

りけいへいぶの秋うらなむね

りけい初唐小のりたるは秋

前とるは秋かふのりたるは秋

は秋の巻は云以知る色あわね

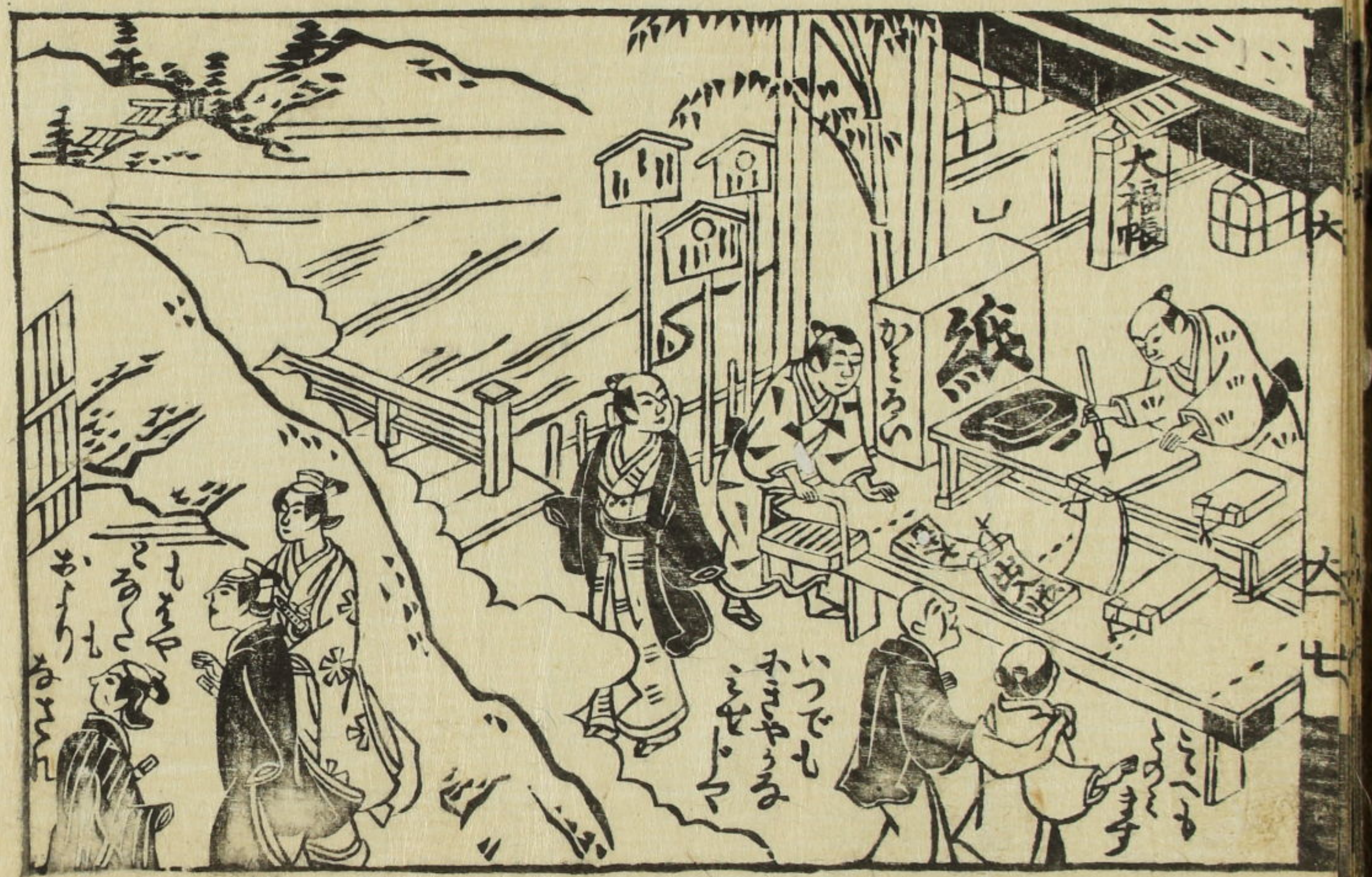
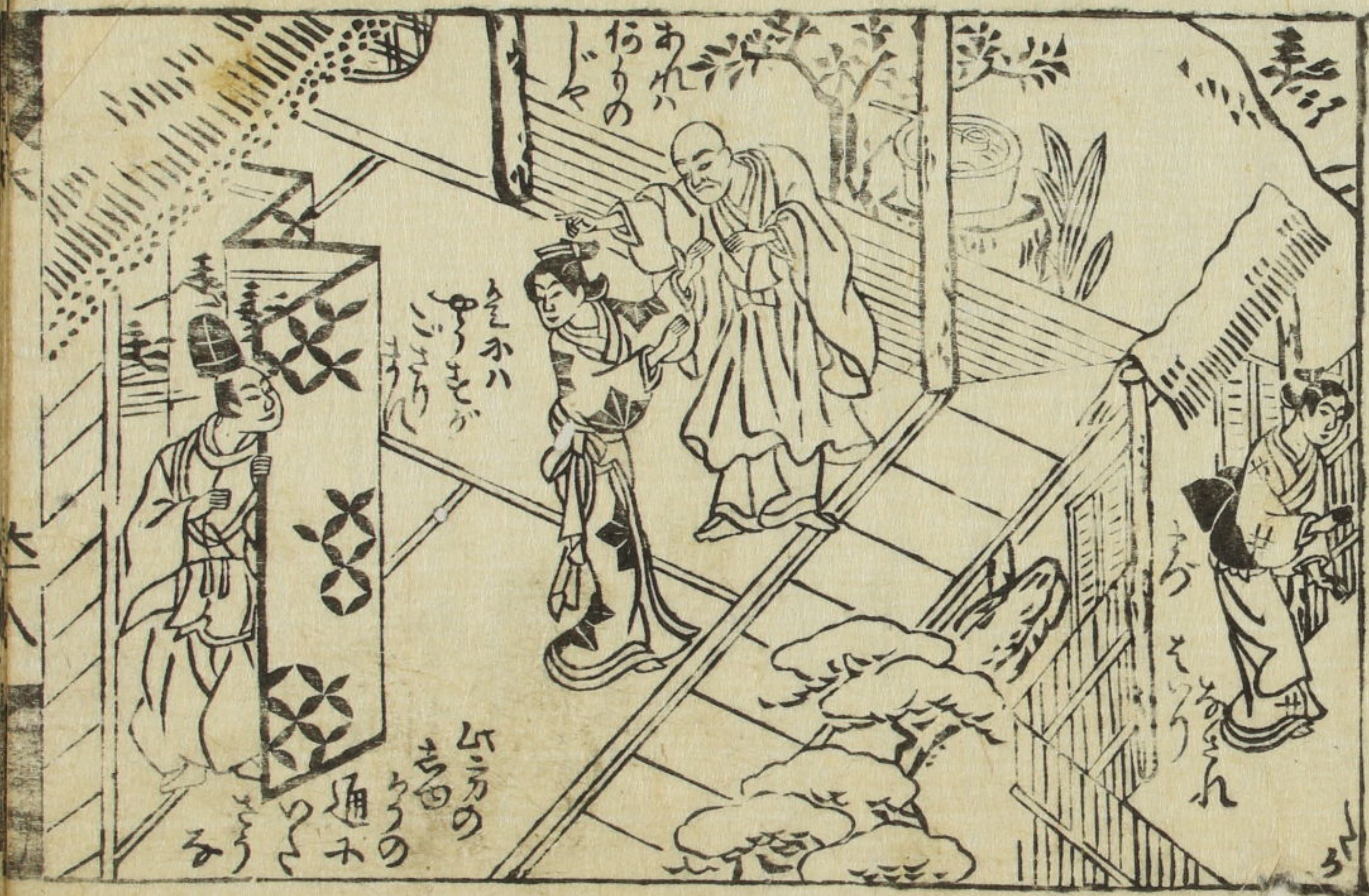
りけいへいぶの秋うらなむね

りけい初唐小のりたるは秋

前とるは秋かふのりたるは秋

考りては、然るに信ありては、いづれにせよ、とて、
 て、其の居る所の内、ふ人あり、作らるる、内、に、
 亦、後、其の、死、に、つ、い、つ、い、つ、い、つ、い、つ、
 懐の、込、を、て、ま、い、し、が、身、に、い、つ、い、つ、い、つ、
 と、い、つ、い、つ、い、つ、い、つ、い、つ、い、つ、
 を、い、用、中、の、事、に、お、つ、い、つ、い、つ、い、つ、
 の、事、を、い、つ、い、つ、い、つ、い、つ、い、つ、
 依、頼、が、あ、つ、い、つ、い、つ、い、つ、い、つ、
 と、い、つ、い、つ、い、つ、い、つ、い、つ、
 考、り、て、い、つ、い、つ、い、つ、い、つ、
 考、り、て、い、つ、い、つ、い、つ、い、つ、
 と、い、つ、い、つ、い、つ、い、つ、
 考、り、て、い、つ、い、つ、い、つ、い、つ、
 と、い、つ、い、つ、い、つ、い、つ、
 考、り、て、い、つ、い、つ、い、つ、い、つ、
 と、い、つ、い、つ、い、つ、い、つ、
 考、り、て、い、つ、い、つ、い、つ、い、つ、
 と、い、つ、い、つ、い、つ、い、つ、

考りては、然るに信ありては、いづれにせよ、とて、
 て、其の居る所の内、ふ人あり、作らるる、内、に、
 亦、後、其の、死、に、つ、い、つ、い、つ、い、つ、
 懐の、込、を、て、ま、い、し、が、身、に、い、つ、い、つ、
 と、い、つ、い、つ、い、つ、い、つ、い、つ、
 を、い、用、中、の、事、に、お、つ、い、つ、い、つ、
 の、事、を、い、つ、い、つ、い、つ、い、つ、
 依、頼、が、あ、つ、い、つ、い、つ、い、つ、
 と、い、つ、い、つ、い、つ、い、つ、
 考、り、て、い、つ、い、つ、い、つ、い、つ、
 考、り、て、い、つ、い、つ、い、つ、い、つ、
 と、い、つ、い、つ、い、つ、い、つ、
 考、り、て、い、つ、い、つ、い、つ、い、つ、
 と、い、つ、い、つ、い、つ、い、つ、
 考、り、て、い、つ、い、つ、い、つ、い、つ、
 と、い、つ、い、つ、い、つ、い、つ、
 考、り、て、い、つ、い、つ、い、つ、い、つ、
 と、い、つ、い、つ、い、つ、い、つ、
 考、り、て、い、つ、い、つ、い、つ、い、つ、
 と、い、つ、い、つ、い、つ、い、つ、



ぶらぶらするはまのナリ分をいふ始より終り
にかまふとふいふ私をいふ鬼物漢に的
事柄虎之のぼろを牛としく虎石と鹿石を牛
おどく。虎のぼろは田の鏡のたふれ終をいふ
作はるるをいふ。虎のぼろは田の鏡のたふれ
名をいふ。虎のぼろをいふ。虎のぼろをいふ。
いふ。虎のぼろをいふ。虎のぼろをいふ。他
まの鬼物漢のぼろをいふ。虎のぼろをいふ。
まの鬼物漢のぼろをいふ。虎のぼろをいふ。
かじり系とす。いふ。虎のぼろをいふ。他
年久のぼろをいふ。虎のぼろをいふ。他
かじり系とす。いふ。虎のぼろをいふ。他
鬼物漢のぼろをいふ。虎のぼろをいふ。他
まの鬼物漢のぼろをいふ。虎のぼろをいふ。他
いふ。虎のぼろをいふ。虎のぼろをいふ。他

あつたまのぼろをいふ。虎のぼろをいふ。他
いふ。虎のぼろをいふ。虎のぼろをいふ。他
のぼろをいふ。虎のぼろをいふ。他
つとめをいふ。虎のぼろをいふ。他
まの鬼物漢のぼろをいふ。虎のぼろをいふ。他
かじり系とす。いふ。虎のぼろをいふ。他
まの鬼物漢のぼろをいふ。虎のぼろをいふ。他
いふ。虎のぼろをいふ。虎のぼろをいふ。他
まの鬼物漢のぼろをいふ。虎のぼろをいふ。他
いふ。虎のぼろをいふ。虎のぼろをいふ。他
まの鬼物漢のぼろをいふ。虎のぼろをいふ。他
いふ。虎のぼろをいふ。虎のぼろをいふ。他
まの鬼物漢のぼろをいふ。虎のぼろをいふ。他
いふ。虎のぼろをいふ。虎のぼろをいふ。他
まの鬼物漢のぼろをいふ。虎のぼろをいふ。他

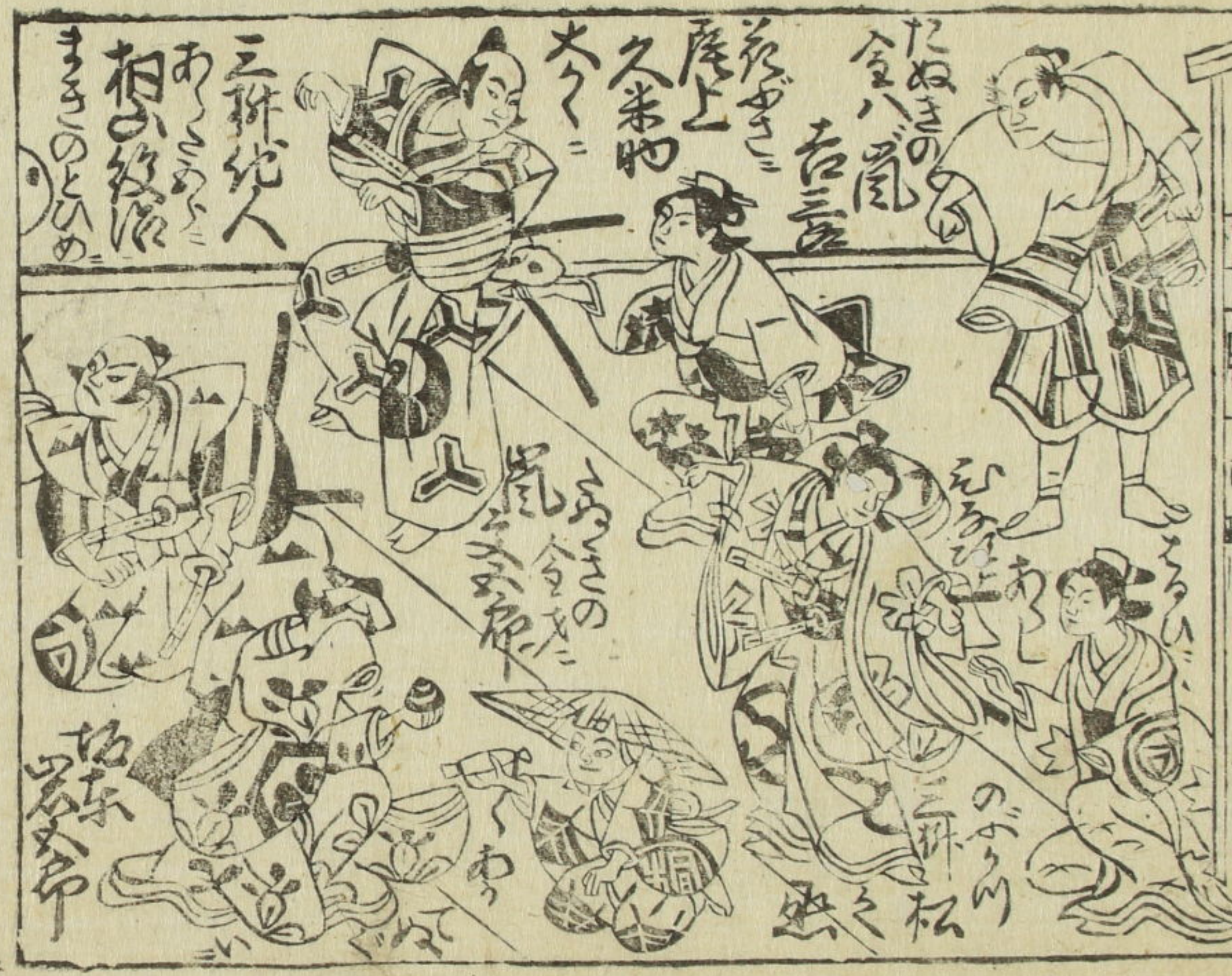
それの如きは他のおまの事分るべくしてか
とて此國^{日本}のまの事分るべくしてか
其事を^{日本}の事分るべくしてか
先づ後刻進^{日本}の事分るべくしてか
先づ後刻進^{日本}の事分るべくしてか

空上吉 二 楯 大 五 郎 一

其の事分るべくしてか
先づ後刻進^{日本}の事分るべくしてか
先づ後刻進^{日本}の事分るべくしてか

其の事分るべくしてか
先づ後刻進^{日本}の事分るべくしてか
先づ後刻進^{日本}の事分るべくしてか

萬葉文庫
三卷



頃いりらるが想存申渡がし隔まで重く御の
久しうと申すより一たの自れ本之者もいと
[舟] 舟これ程のちよふむとて人下とぞ [舟]
全くちよふとていふがけは百船の中入ゆく
船中の舟は数船のあつたるよ入る舟船とて
船井のまゝ後をたもて舟の二艘とりの舟は船
り舟がそ二艘よりまゝなるを船の船とぞ
船中の舟は数船のあつたるよ入る舟船とて
あつたれての舟は [舟] 舟とていふは人下
舟中の舟をみるの舟はあつたるよ入る舟船
[舟] 舟これ程のちよふむとて人下とぞ [舟]
て舟はといふとて舟とていふは人下とぞ
舟中の舟は数船のあつたるよ入る舟船とて
舟中の舟は数船のあつたるよ入る舟船とて
舟中の舟は数船のあつたるよ入る舟船とて
舟中の舟は数船のあつたるよ入る舟船とて

大いりらるが想存申渡がし隔まで重く御の
久しうと申すより一たの自れ本之者もいと
[舟] 舟これ程のちよふむとて人下とぞ [舟]
全くちよふとていふがけは百船の中入ゆく
船中の舟は数船のあつたるよ入る舟船とて
船井のまゝ後をたもて舟の二艘とりの舟は船
り舟がそ二艘よりまゝなるを船の船とぞ
船中の舟は数船のあつたるよ入る舟船とて
あつたれての舟は [舟] 舟とていふは人下
舟中の舟をみるの舟はあつたるよ入る舟船
[舟] 舟これ程のちよふむとて人下とぞ [舟]
て舟はといふとて舟とていふは人下とぞ
舟中の舟は数船のあつたるよ入る舟船とて
舟中の舟は数船のあつたるよ入る舟船とて
舟中の舟は数船のあつたるよ入る舟船とて
舟中の舟は数船のあつたるよ入る舟船とて

上上吉 (丸) 中山才助 小川左

[丸] 舟これ程のちよふむとて人下とぞ [丸]
全くちよふとていふがけは百船の中入ゆく
船中の舟は数船のあつたるよ入る舟船とて
船井のまゝ後をたもて舟の二艘とりの舟は船
り舟がそ二艘よりまゝなるを船の船とぞ
船中の舟は数船のあつたるよ入る舟船とて
あつたれての舟は [丸] 舟とていふは人下
舟中の舟をみるの舟はあつたるよ入る舟船
[丸] 舟これ程のちよふむとて人下とぞ [丸]
て舟はといふとて舟とていふは人下とぞ
舟中の舟は数船のあつたるよ入る舟船とて
舟中の舟は数船のあつたるよ入る舟船とて
舟中の舟は数船のあつたるよ入る舟船とて
舟中の舟は数船のあつたるよ入る舟船とて

此の書は子の悪業を悔ひて生し運命を考へ
其の功の功を記して其の功の功と云ふ
る虎よ其の功を記して其の功の功と云ふ
らんは其の功を記して其の功の功と云ふ

上上書 **調** 嵐文力部 一 五

此の書は子の悪業を悔ひて生し運命を考へ
其の功の功を記して其の功の功と云ふ
る虎よ其の功を記して其の功の功と云ふ
らんは其の功を記して其の功の功と云ふ
此の書は子の悪業を悔ひて生し運命を考へ
其の功の功を記して其の功の功と云ふ
る虎よ其の功を記して其の功の功と云ふ
らんは其の功を記して其の功の功と云ふ

この書は子の悪業を悔ひて生し運命を考へ
其の功の功を記して其の功の功と云ふ
る虎よ其の功を記して其の功の功と云ふ
らんは其の功を記して其の功の功と云ふ

上上書 **+** 友川柳書 一 五

此の書は子の悪業を悔ひて生し運命を考へ
其の功の功を記して其の功の功と云ふ
る虎よ其の功を記して其の功の功と云ふ
らんは其の功を記して其の功の功と云ふ
此の書は子の悪業を悔ひて生し運命を考へ
其の功の功を記して其の功の功と云ふ
る虎よ其の功を記して其の功の功と云ふ
らんは其の功を記して其の功の功と云ふ

上上書 **①** 沢村宗十郎 一 五

此の書は子の悪業を悔ひて生し運命を考へ
其の功の功を記して其の功の功と云ふ
る虎よ其の功を記して其の功の功と云ふ
らんは其の功を記して其の功の功と云ふ

あつた。之をば、
一ん、
終、
い、
鳴、
と、
を、
と、
あ、
理、
若、
ま、
を、
入、

野、
と、
は、
業、
と、

上書

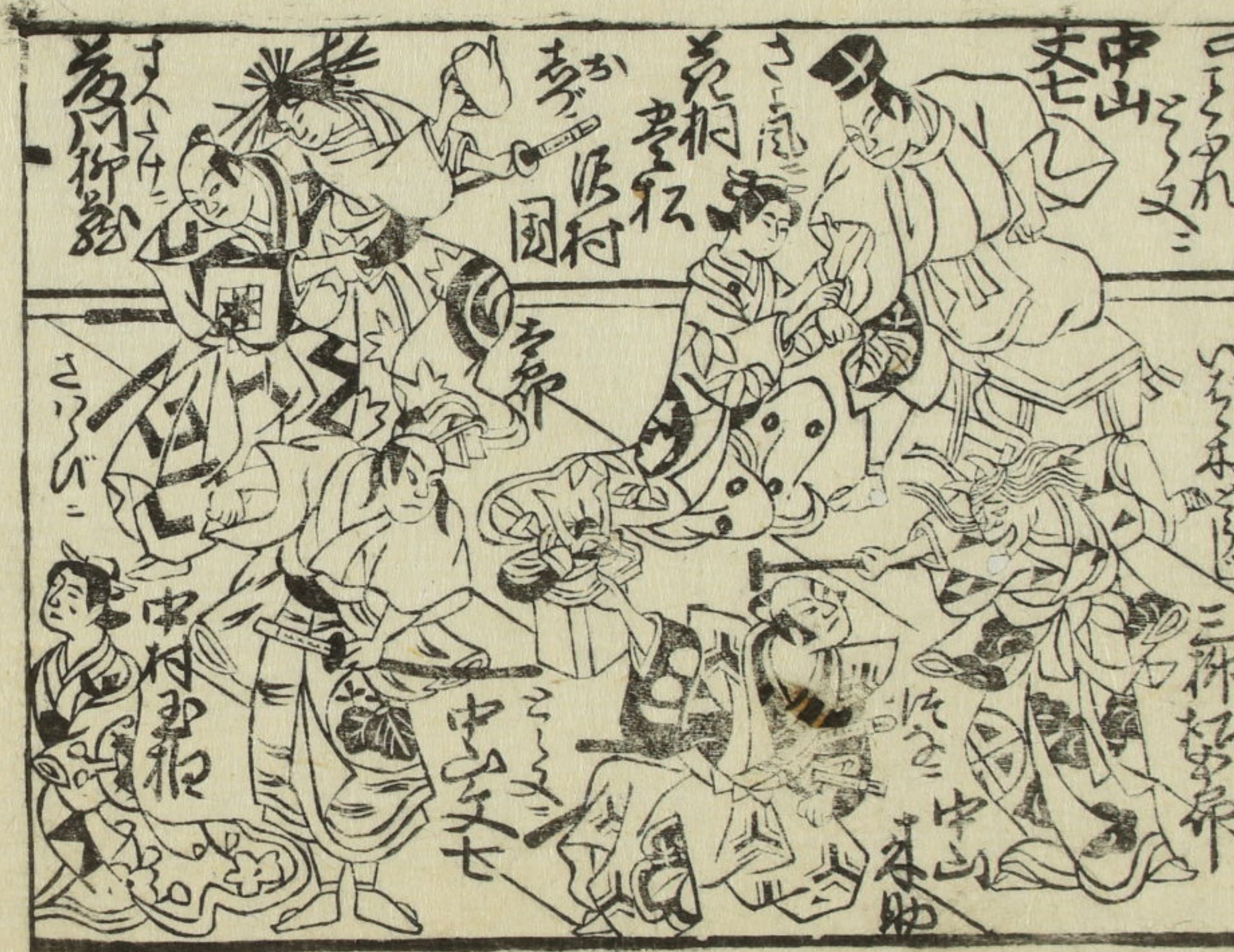


坂東岩戸

并

野、
と、
は、
業、
と、
と、
は、
業、
と、
と、
は、
業、
と、

四 魁百物語
小川在
三冊巻

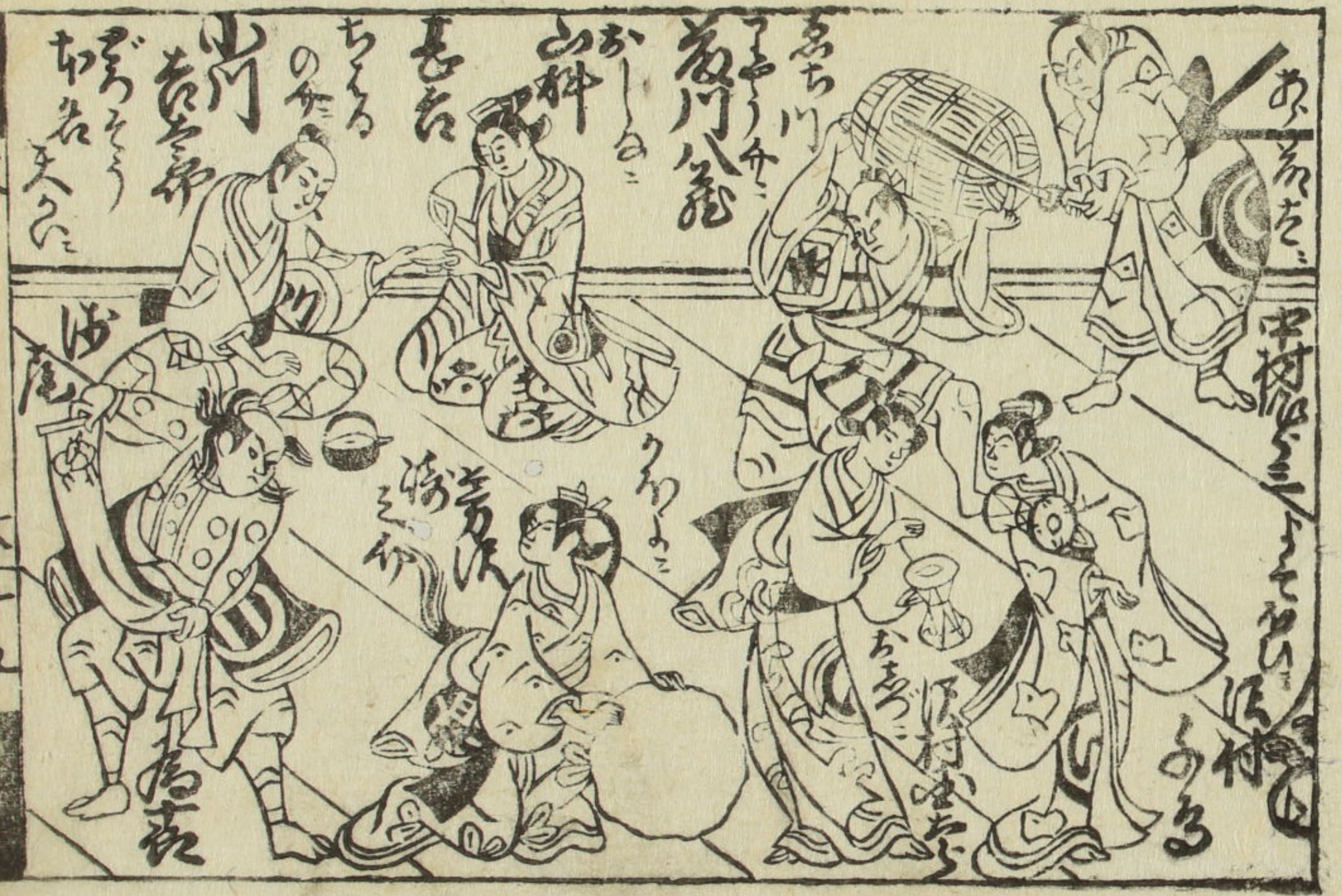


中山
松本
松尾
松平
松岡
松浦

松尾
松岡
松浦

中山
松本
松尾
松平
松岡
松浦

松尾
松岡
松浦



中山
松本
松尾
松平
松岡
松浦

松尾
松岡
松浦

中山
松本
松尾
松平
松岡
松浦

松尾
松岡
松浦

陸天岡山軍門以志遠人空居がと彼唯の表
以年ひ多力合ひて以終孫を以傳しをわきま
に長國わを以傳承するののひひ人た
るは終に古きも趣の之を以て以は守る
合じ方と合ひて以守るを以ては守るを
方以てを以て

上書 〇 丸桐老松 小川丸

陸天軍門の志遠人空居がと彼唯の表
以年ひ多力合ひて以終孫を以傳しをわきま
に長國わを以傳承するののひひ人た
るは終に古きも趣の之を以て以は守る
合じ方と合ひて以守るを以ては守るを
方以てを以て

上書 〇 山科甚右 小川丸

陸天軍門の志遠人空居がと彼唯の表
以年ひ多力合ひて以終孫を以傳しをわきま
に長國わを以傳承するののひひ人た
るは終に古きも趣の之を以て以は守る
合じ方と合ひて以守るを以ては守るを
方以てを以て

上上 〇 中村王祐 小川丸

陸天軍門の志遠人空居がと彼唯の表
以年ひ多力合ひて以終孫を以傳しをわきま
に長國わを以傳承するののひひ人た
るは終に古きも趣の之を以て以は守る
合じ方と合ひて以守るを以ては守るを
方以てを以て

上 川 漢村子 小川

其妻... 漢村子... 小川... 川... 漢村子... 小川... 川... 漢村子... 小川...

市川 市川 市川 市川 市川 市川 市川 市川 市川 市川

嵐 嵐 嵐 嵐 嵐 嵐 嵐 嵐 嵐 嵐

上 上 上 上 上 上 上 上 上 上

上上吉 上上吉 上上吉 上上吉 上上吉 上上吉 上上吉 上上吉 上上吉 上上吉

尾上 尾上 尾上 尾上 尾上 尾上 尾上 尾上 尾上 尾上

山風 山風 山風 山風 山風 山風 山風 山風 山風 山風

助 助 助 助 助 助 助 助 助 助

日 日 日 日 日 日 日 日 日 日

何 何 何 何 何 何 何 何 何 何

何 何 何 何 何 何 何 何 何 何

何 何 何 何 何 何 何 何 何 何

何 何 何 何 何 何 何 何 何 何

何 何 何 何 何 何 何 何 何 何

何 何 何 何 何 何 何 何 何 何

何 何 何 何 何 何 何 何 何 何

何 何 何 何 何 何 何 何 何 何

○改元日

三ヶ津 さん

忠臣蔵 ちゆうしんざう 支合 しあひ 乃 の 評林 ひやうりん 全四冊

花品定

此書は修成の事を知るに最も宜しき書也
此書は修成の事を知るに最も宜しき書也
此書は修成の事を知るに最も宜しき書也
此書は修成の事を知るに最も宜しき書也
此書は修成の事を知るに最も宜しき書也

○又古よとおひ中上書

花品定 はなひな 秘抄 ひしやう

優家七部書 ゆうけしちぶしよ

儀者論語 ぎしやろんご 全四冊

此書は修成の事を知るに最も宜しき書也
此書は修成の事を知るに最も宜しき書也
此書は修成の事を知るに最も宜しき書也
此書は修成の事を知るに最も宜しき書也
此書は修成の事を知るに最も宜しき書也

○目上

一 天保後修成の事を知るに最も宜しき書也
一 天保後修成の事を知るに最も宜しき書也
一 天保後修成の事を知るに最も宜しき書也
一 天保後修成の事を知るに最も宜しき書也
一 天保後修成の事を知るに最も宜しき書也

未十二月初七日ヨリ

習字の力は蘇生

土幕

役割

一 友松守即 ともまつり の事を知るに最も宜しき書也
一 友松守即 ともまつり の事を知るに最も宜しき書也
一 友松守即 ともまつり の事を知るに最も宜しき書也
一 友松守即 ともまつり の事を知るに最も宜しき書也
一 友松守即 ともまつり の事を知るに最も宜しき書也

大 六
大 七
にまゝの義家よりいふ方なき人の言ひ
いふまゝなり

一嵐平助 多知村を以て其ノ家あり
一嵐七三郎 多知村を以て其ノ家あり
後々の母を以て其ノ家あり

一市川義隆 以て其ノ家あり
一甲村十次郎 以て其ノ家あり
くはる力強て其ノ家あり

一坂東海老 以て其ノ家あり
一甲村幸平 以て其ノ家あり
一甲村代三 以て其ノ家あり

一市川七郎 以て其ノ家あり
一嵐雛次 以て其ノ家あり
一甲村越前 以て其ノ家あり

一甲村次郎 以て其ノ家あり
一市川四郎 以て其ノ家あり
一市川五郎 以て其ノ家あり

一市川六郎 以て其ノ家あり
一市川七郎 以て其ノ家あり
一市川八郎 以て其ノ家あり

安永五年

申 正月吉日

承安町下町

八文字公儀板



